



椎名誠

銀座のガラス

やるせなくて、
だけど心の奥のほうが懐しい
不思議感覚の青春ギラギラ大作

朝日新聞社 ● 定価 1600円 (本体 1553円)

挿画・沢野ひとし

朝日新聞社



椎名誠

銀座のカラス

銀座のカラス

発行 一九九一年十月一日 第一刷

一九九一年十一月五日 第四刷

著者 椎名 誠

発行者 木下秀男

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二

電話 〇三-三五四五-〇一三一(代表)

振替 東京〇-一七三〇

編集・図書編集室 販売・出版販売部

印刷・製本 凸版印刷株式会社

© MAKOTO SHIINA 1991

Printed in Japan

ISBN4-02-256339-7

日本音楽著作権協会(出)許諾第2000号-101

定価はカバーに表示してあります

銀座のカラス

昭和四十年代の半ば……というところ、日本は高度成長期のただ中で、なんだか街中がいたるところで騒々しかった。

松尾勇はデパート業界の新聞や雑誌を発行している小さな会社のサラリーマンだった。歳は二十三歳。千葉の海育ちなので漁師のように色が黒い。

新聞社といっても、松尾の勤めている会社の『百貨店ニュース』は四頁から八頁ぐらいの週刊業界紙なので、発行部数は五千部もっていない。五千部足らずでも新聞といえるのだろうか、とそのことを初めて知った時松尾は単純に驚いてしまった。

けれど世の中には実際まったくいろんな新聞があつて五千部ぐらいで驚いていちゃいけない、ということを入社してすぐに先輩社員から知らされることになる。

会社を送られてくる別の業界新聞の中には靴下だけの記事を書いている新聞とか、メリヤスの素材だけを扱う新聞というのがある、それぞれ二千部とか三千部ぐらいしか出ていない。けれどそれで充分会社仕事になっているのだ、

と上司の亀沼年男からおしえられた。

亀沼は胃が悪いくせにヘヴィスモーカーの大酒飲みで、いつも自分の胃の悪口を言いながら顔をしかめ、口の横っちょで両切りピースをひかひかやっている。

その頃健康薬品かなにかのコマーシャルで若い娘が明るい声で「胃腸も肝臓もいい調子!」とうたうのがあつた。

亀沼は夕方近くになって胃がますます重苦しくなると、暗くくすんだダミ声で「胃腸も肝臓も悪い調子!」ともうまるっきりヤケクソのどうしようもない歌をうたっていた。

亀沼は『百貨店ニュース』というその業界新聞の編集長で、髪の毛をやくざか坊さんのようにばきりと丸刈りにしている。その会社に入社して半年間、松尾は亀沼の部下だった。仕事は慌ただしかったがひと仕事終わったあとの酒盛りが楽しめで、六人いる編集部員は、たいてい全員でぞろぞろと近くの安酒屋へ出かけていった。

亀沼は酒が入つてくると一時的に胃の重苦しさから解放されるらしく、酔っていくにつれて確実に雄弁になっていた。

すでに編集十年のベテランだったが、亀沼のいいところは、こういう会社勤めている人にありがちなやや屈折気味の野望なんてものがあまりないことだった。

「いまはこういう仕事をしているがおれは本来は作家になるつもりなんだ。いまは書いていないがおれがそのうち小説を書いたら大変なことになるんだよ……」などということをやった赤眼やアブラ眼でくどくどギトギト言う先輩部員も何人かいたが、亀沼はただもう目下の編集長仕事に力を集中し、またそれを面白がっているようだった。

デパートと薄暗い会社を往復し、週末に印刷屋と居酒屋にもぐり込む、という日々だったが、初めての会社勤めというのは案外面白かった。

デパート業界には時おりとんでもなく面白い人がいたし、そういう人に聞いた話を結構自由に原稿として書ける、というのも嬉しかった。

ところが亀沼の下で気ままに仕事をやれたのは半年とすこしで、間もなくその会社創業以来の人事異動によって松尾は雑誌編集の部に回された。

業界紙というのは人の入れ替わりがえらく激しいところで、一年も勤めているともう立派な中堅社員だった。そうして松尾が配属された編集部は編集長一人部下一人というひどくわびしいところだったのである。

そこで作っているのは『店舗経営月報』という三十二頁の薄い月刊誌で発行部数は八百部だった。内容は主にデパートの売り上げ分析や商品の売れ行きのレポートで、地味

なことこの上なく、実際作っていてもあまり面白くなかった。

けれど業界誌なんだから仕方がないだろうな、と思いながら、松尾はおとなしく売上数字を計算したり、グラフにしたりという仕事を続けていた。

編集長は山羊のようにぼしゃぼしゃしたアゴ鬚を生やし、雨の日の沼のようにはてしなく陰気で無口な初老の男だった。松尾はそのままでいるとその陰気な男の、沼のような人生の中にも不安な日々だった。

大会社の人事異動ならば、移った先にもいろいろな個性を持った上司や同僚がいて、そこでまたさまざまな刺激を受けられるのだからけれど、社員二十人足らずの会社での人事異動というのは、具体的には机を五メートルぐらい移動させるぐらいの変化しかないから、しばらくは「異動」してはいないような、たしかに五メートル「移動」したようなヘンテコな気持ちだった。

けれど今までいた新聞の編集部とは仕事の内容もサイクルもまったく違うので、以前のように社内でも顔を合わせていても、やはり松尾勇は山羊ヒゲ編集長のいる陰気沼のほうの住人だった。

それでも時おり亀沼たちの酒宴に参加させてもらったり

したが、どうもヨソの部の者が加わると同じ会社の不平不満話でも微妙にどこかしっくりしない、というところがあって、そのうちに誘われてもなんとなく松尾の方が遠慮してしまうようになった。

そうこうするうちに間もなく松尾は会社をやめることを考えるようになった。やめてどこかもっとこの若いエネルギーを存分に吸収してくれそうな会社や仕事を捜してみようか、と松尾は毎日のように考えはじめた。

そんな気分です事をしていると、ある日耳よりのニュースが入った。話はえらく突然だったが、近く会社が引越するらしい、というものだった。

「百貨店ニュース社」は新橋にあった。新橋駅の烏森口から歩いて七、八分の小さなビルの五階である。

新しい会社の引越先は銀座だという。

おお、なんと銀座だと！

松尾は熱心にその緊急噂話のようなニュースを聞いた。新橋から銀座まではすぐそばだったが、街の気配はまったく違っていた。銀座に越しても松尾の目下の仕事が大きく変わるということはないだろうが、なんとなく今よりも気持ちが出るような気がした。

その噂は本当のようだった。何か経営者の特別な人間関係で急なうまい物件話を持ち込まれてきたらしいのだ。

「みんなに聞いてもらいたい」

数日後、社長の田中丸耕三は何時よりも早く引き締まった顔をして全社員の前に立った。

「緊急全体会議」というものが通達され、翌朝全社員が集まったところで社長の話がはじまったのだ。「全体会議」とはいっても、それは名ばかりで、ひと月に一度ほど社長と専務が一方的に話をするだけなのだ。

その日田中丸社長の話すことはすでに全社員が知っている。総務と経理と庶務と社長秘書のような仕事を複雑兼任している桑田がもう何日も前にくわしい話を全部社員に喋ってしまっていたのだ。桑田は十八歳の時に就職して以来十年間ずっと総務関係全般の仕事をしている。亀沼たち古参の社員からはもっぱらクークと呼んでいた。

「我が社も今年でいよいよ創業十周年を迎えた。我々の仕事を取り巻く百貨店やスーパー業界の状況はまだまだ厳しい問題を沢山抱えておる。問題は山積し、我々業界ジャーナリズムに課せられた使命はさらに一段とその重要性を増している――」

かつて文学青年だった田中丸社長は社内の人々の前で話す時もいつも生真面目そのものだった。ただし冒頭に話すことはたいがい何時も同じである。業界の状況はますます厳しく、我々の使命はさらに深まっている……というやつ

だ。

社長が生真面目なので、社員もそういう時はみんな神妙な顔をして聞いていた。自分の机のそばに立って、なかなか全員お説教でもされているように下を向いていた。胸を張って社長の顔をじっと見つめる、というのではあまりにも恥ずかしいからだ。

「……こういう状況の中で、我が社もまたさらなる発展と可能性を目指して、業務拡張のために、少々急な話であるが、本社ビルを勇躍移転拡張することにした」

田中丸社長はそこで言葉を切り、社員一同の顔を見た。「本社ビル」とエラそうにいったって本社しかないのだが誰もがもうそのあとのもつとくわしい内容を知っていた。けれどみんなは下を向いたまま深く驚いたように、声にならない声を出した。みんな心やさしい社員たちなのだから、と松尾はつくづくそう思った。

電撃的な引越話は電撃的に進み、田中丸社長の話があった日から二週間後に引越しとなった。

クー坊がまたひそかに伝えてきたところによると、その賃貸物件はとつともない低料金の好条件で、もしかするとこれはそのビルの中に何かヘンナモノが出るのかもしれないよ、というような話が陽気な冗談話としてたちまち社内に広まっていた。

新しく移るビルは銀座八丁目にあった。ちょっと異様に細長いビルだったが、一方の窓は銀座の本通りに面していた。それまでいたところのビルが新橋の場末のなんだかくすんで埃っぽいようなところだったので、窓をあけたら華やかな銀座通りが眼下にひろがっている、というのはやはり相当に気持ちの浮きたつ話だった。

田中丸社長はその銀座通り側に面した窓を背に大きなスチール製の机を置いて座った。社長の前に専務の富村文郎の机が置かれ、その前に営業担当の古参社員が、社歴の古い順に座った。業界紙というのは編集よりも営業部の力が強いのが普通だ。誰が決めた訳でもなかったが結局銀座通り側の窓から偉い順に座っていくという、とてもわかりやすい機の配置になった。

専務の富村はその会社が一番早く入社した社員一号であった。まだ四十代の半ばだったが長身の美男子で、歳の割にはたつぷりと豊かな髪をいつもボマードでべったりうしろになでつけていた。

松尾の机は新聞の編集部のうしろ側の壁に山羊ヒゲ編集長と向かいあう形で置かれた。これもまた実に正しい機の配置構図であった。

仕事の内容は変わらないけれど、やっぱり銀座に職場が移ったことで松尾の気分もいろいろ変わってきた。



早速友達に会社の引越しを知らせ、聞かれてもいないのに会社の場所をくわしく説明したりした。「窓をあけるとすぐ前が銀座の本通りなんだよ。だから車の音がうるさくてねえ……」などと松尾は嬉しそうにグチったりした。

銀座八丁目にはその頃まだキャバレーがあった。すぐ向いのビルの一角にはひとときわ派手なくなるくる回るネオンが夕暮れ前の明るいうちからにぎやかに動きまわっていた。ネオンには「キャバレーハリウッド」と書かれていた。

その近くにはダンスホールなどというのもあった。ホール前の舗道にはほかの通りよりもちょっと貧弱な柳の木が並んでいて「これでも銀座の柳なんだからな。ナメンナヨナ！」などというふうに時おり吹き抜ける風の中で枝葉をざわざわ揺すったりしていた。

新しいビルに移って一カ月もしないうちに松尾にとつてはまたまたとてつもなく大きな事件がおきた。

三十二頁の薄くて貧弱な月刊誌『店舗経営月報』の編集長をしている室町が、その同じく貧弱な自分のアゴ鬚をしゅわしゅわと揉みしだきながらひくい声で言ったのだ。

「いや、急にこんなところに呼び出したりしてすまん。会社の席で話してもよかったんだけど、まあたまには君とこういう話の時はこういうところでゆっくり話した方がいいと思つてね……」

室町はその日思いがけないくらい沢山の話をした。

引っこしてきたビルの一階にある「純喫茶スワン」の中だった。考えてみると松尾が室町の部下になって約五カ月になるが、一緒に喫茶店に入ってこんなふうに話をしたのはそれが初めてだったのだ。

いったいどんなことを話すのだろうか、と松尾はじつに緊張していた。普段殆ど話をしないから、室町がどんなことを考えている人なのかよくわからなかったのだ。

室町は広島生まれで、そこにまだ自分の母親が生きている、ということをはひどくまわりくどい話の中からぼそぼそと語っていた。母は八十二歳で、まだそこそこは元気なのですが……と、室町は言った。

「そして急な話なのだけれど、私は間もなく会社勤めを辞めようと思っている。郷里に帰って自分の家の仕事を引き継いで母を安心させてやりたいのでね……」と室町は言った。

たぶんその日の話が自分と室町の交わしたもつとも長い会話になるのではないだろうか、と松尾は考えていた。

室町もまた悲しい程に気弱で超生真面目の男だったのだ。小学校の教師を退職してきてその会社に四年間勤め、なんだか大慌てで逃げ去るようにしてその会社を辞めていった。

数日後田中丸社長は松尾を呼び、

「松尾君。ちょっと大変かもしれないがね。このあとは君が『店舗経営月報』の編集長をやっていかないか——」

と、いうようなことを、また例によってその前後に難しい業界状況と業界の我が社に対する期待と我が社の責任というような話をいろいろまぜ加えながらひどく力をこめて言った。

室町が辞めたあととは誰かまた別の先輩社員が編集長になるのだろうか、と漠然と考えていた松尾はまったく実に驚いてしまった。

わずか三十二頁で、部数は八百部の小雑誌といっても、編集長の手伝いをするというのと、自分が責任をもって編集をやる、というのとでは話は全然別である。

とくにその雑誌の中心記事は、数字とさまざまな現象を組み合わせたり、その中身をじっくり分析したりする経済アナリストのようなレポート仕事である。

松尾勇が室町の部下になってそろそろ五カ月になろうとしていたが、その間『店舗経営月報』のレポート記事は室町がずっと書いていた。だからそういう仕事は自分には殆ど関係のない仕事であり、またやれと言われてもできない仕事だろうと思っていた。五カ月の間室町から指示されるままに松尾のやっていた仕事は、数字の表を書き写したり、

そこから簡単なグラフをつくったり、原稿用紙の文字をかぞえて雑誌のレイアウトをしたり、それを校正したり、データを貰いにいたり、電話をとったり、お茶をくんだり、コーヒを頼んだり……というような、まあそういった雑多なお手伝い仕事全般であった。

田中丸社長はその下働きにいきなり編集長をやれというのである。

松尾が考え込んでしまったのは、その仕事が難しそうなのと同時に、そっちの方へそうやってじわじわりこんでいくと、自分もやがて室町のようになっていつてしまうかもしれない、という漠とした不安があったからだ。

毎日背中を丸めて黙ったままひょこひょこ会社にやってきて、重くて大きなタイガー式手回し計算機を一日中がしゃがしゃ回して、正午すぎに弁当をたべ、こまかい文字でヨコ書き原稿を書き、六時にまた背中を丸めて帰っていく……という生活の、どこが田中丸社長のいう「躍動する編集者」とか「業界のために戦うジャーナリスト」なのだろうかと、松尾は素朴に首をかしげてしまうのだった。

そういうことを松尾に少しずつおしえるということもしないで、渡り鳥がうしろも見ないでさばさと沼から飛びたつていったように、いきなり辞めていつてしまった室町は随分自分勝手な人間ではないか……とも思った。

「まああの人はガクシャだからねえ。一種の専門バカというようなもので、しょうがないんだよ。でもアレだよ松尾くん。まだ君は充分若いんだし、折角のチャンスなんだからどんどん張り切って自分の思うように仕事をしていったらいいんだよ」

思い余って亀沼にありのままの不安を言ったところ、亀沼は両切りピースの煙をぶわぶわと大量に吐きだしながらそんなことを言った。

その日松尾は三年ぶんの月刊『店舗経営月報』を下宿に持って帰り、一冊ずつじっくりと眺めていった。どの雑誌も会社で何度か眺めていたもので、改めて腰をすえて眺めてもやっぱり少しも面白いものではなかった。

二年前の一月号は「どうなる今年の消費景気——大型需要を期待する業界大手——目標一七〇八%増を目標む量販店業界」というやたらに長いタイトルがついた数字まじりの論文だった。敷きつばなしだったのでひんやりとする布団に横になり、じっくり力をこめて読んでいった。そこに何が書いてあるのか、ひとつずつ理解しながら読んでいくと思ったのだ。

少々くたびれたけれど、目と腹に力を入れてじっくり読んでいくと、さすがにそこで語ろうとしていることのいく

つかが頭の中にすこしずつ入ってきた。

要は各頁のいたるところにある数表やグラフと一緒に見ていけばいいのである。

松尾は室町が背中を丸め、スタンドライトのあかりの中に覆いかぶさるようにして何事かひくくぶつぶつぶやきながら細文字の万年筆をしゅるしゅる走らせていたいつもの光景を思いだしていた。

あの人はつまり、ああやって目の前にいくつかの新しい数字の表を置き、その表やグラフを文字で解説していく、という作業をしていたのだな、ということがそこで漸くわかってきた。

同じ年の三月号のトップレポート「第二次大型攻勢に転じる大都市百貨店の成長戦略——その経営基盤と成長材料——ヒト・モノ・カネの詳細点検」という同じくとても長いタイトルの十二頁ぶんは、ゆっくり読んでいくうちにすこしずつ面白くなっていった。そこには借金の多い会社はほとんど企業のスケールが大きくなっていて目が離せない。これからの百貨店間の競争はいくら借りられていくら投資できるか——にひとつの成否のポイントがある、というように書かれてあった。

「……そうか、そういうこともあるのか」と、松尾はすこし考え込んでしまった。

それから、自分にもこんなレポートが書けるものなのだろうか、ということについてもしばらく考えてみた。

会社の原稿用紙をひっぱり出し、今読んだレポートの数字の表とグラフを鉄で切り抜き、それだけを見ながら、室町がまとめていたような記事を書いてみることにした。室町のように文章にいろいろな余分な言葉を入れずに要点だけを書いていく、というのがとても難しかった。

「しかしながら……」とか「加うるに……」などというまなじり吊りあげたような語句を書くと、そのあとの文章がなかなか出てこなくて「しかしながら、しかしながら……」などつぶやきつつ、松尾は時おり部屋の中をころげ回った。

土曜、日曜と同じことを続けてやった。ひととおり書いて、室町の書いたものと較べるとたいていどれも長さは三分の一ぐらいのもので、どうも自分の書くものは簡単に話が終わってしまうのが欠点だ——と松尾はつくづく思ったけれど、そうやっていくつかのレポートを自分流になぞって書いていくと、そのうちにけっこうもつともらしい文章など次々に並べて、一見したところなかなか大層なことを申し述べているようなレポートを書くことができるようになった。

亀沼編集長のもとで約半年間『百貨店ニュース』の記者



として記事を書いていた時は、どこそこのデパートがどこにどんな店を作ろうとしている、というようなことや、どの都市でどんな販売競争が行われているか、というようなことを短い文章にまとめるだけのものが殆どだったから、自分一人の手で雑誌に何頁にもわたる記事を、たとえ真似ごとでも書けた、ということは大いに励みになった。

松尾は日曜日の午後、まとめたばかりの「到来するか！ 大型消費景気——耐久消費財の買い換え需要が鍵！」という「！」マークがいくつもついているまことに立派な自作原稿を両手に持ち、アパートの薄暗い六帖間のまん中にきちんと起立した。それから卒業式の時に優秀生徒が声をたからかに弾ませて読む「答辞もしくは送辞」のような恰好で、自分の書いた原稿を口に出して読んでいった。

そうやって朗読すると、松尾は自分の書いたレポートがますます重みをもっておごそかに堂々と、随所に散らばる鋭い分析力と洞察力を惜しげもなくあたりにはらまきながら、読む人に深い感銘を与えずにおかない名文のような気がしてきた。

とくに「しかしながら……」と言葉をつなげるところは読んでいて力が入った。

ひととおり読み終えると松尾は静かに感動し、もしかすると自分にも『店舗経営月報』の編集長ができるかもしれない

ない、と思うようになった。

なんとなく気分をはずませながら夕方近くの、あたりの空気がすこし薄紫色にけぶってみえるような阿佐ヶ谷の町に出た。秋が深まりつつあった。スーパーに行つて夕食のおかずを何日分か買う必要があった。

駅前の電話ボックスがあいていた。

ふいに思いだし、先週ハガキのきていた母親に今日あたり電話しておく必要もあるな、と思った。月に一ぺんぐらひは連絡しなさい、とハガキに書いてあったのだ。

母親は千葉の海べりの町に住んでいた。

「つとめ人というのは、どんな仕事でもとにかく永くつとめる、ということが一番大事なんですからね……」と時おり家に帰ると松尾の母親は口ぐせのようにいつもそう言った。

電話には母親がすぐ出た。

「ああ、母さんかい」

松尾は自分の母親と話すとどういふわけかいつもそうなつてしまうボソボソ声で言った。

「イサムかい。こないだまたハガキを出しましたがね、どうしているのかな、と思つてね」

松尾の母親はもうじき六十歳になる筈だった。

「相変わらずだよ。毎日会社に行つて、夜は十二時ぐら

いには寝て、布団は日曜日にたいてい干しているよ」

嘘だった。日曜日ごとに布団を干せたらいいだろうな、と思うものの、日曜日はだいたい昼すぎまで寝てしまつているので、布団を干す時間があまりないのだ。とくに秋に入つてからは陽が短くなって、日曜日なんかすぐに夜になつてしまう。

「トオルから電話はあるのかい母さん」

透は勇のすぐ上の兄だった。測量の仕事でオーストラリアに行き、もう一年近くになっている。勇の上には三人の兄がいた。結婚して子供のいる長男の太^{ふとし}のほかはみんな家から外に出てしまつてい

「トオルは手紙だけですわね。今度のお正月にはまだ帰れないと言っていましたよ」

「そうか、トオルのいるオーストラリアは南半球だから正月はちょうど夏になるんだな」

「トオルの手紙にもそう書いてあつたけれど、どうもわたしにはそのへんがよくわからなくてねえ……。オーストラリアといつたつて十二月は十二月だろうに」

電話のむこうの母の声がずっと以前よりすこししゃがれてきているな、と勇は思つた。

「正月にはそっちへいくよ。このごろなんとなく正月にあの母さんのつくるダイコンとニンジン^{ニンジン}の料理を食いたいと

思うようになったよ。前は酸っぱくて嫌いだったんだけれどね。なんていったっけ。カマスとかいったねえ……」

「ナマスのことかね。なんですかカマスだなんて」

「そうだそうだ、ナマスだったか……。勇は一人でくしゃくしゃっと笑った。」

「そうだ、それからね母さん。おれもしかすると会社の編集長になるかもしれないんだ」

勇はひと息ついてから言った。

「編集長っていうのはえらい人がなるんだろう。どうしてお前みたいな新米社員がそんなものになれるんですか」

松尾の母親の声はまるつきり落ち着いていた。いつもそうであるように、まったく頭から信じていないような口ぶりだった。

「本当なんだよ母さん。しかしながらです……」松尾はそこでついヘンテコなレポート口調になってしまった。

翌日会社に行くところから桑田が出てくるところとはち合わせした。桑田は専務の富村文郎と同じようにオールバックにべったりとポマードをつけていたが、小柄なのでなんだかやたらに頭ばかりが目立っていた。

「おい編集長さんよ」

両手をくるむようにしてハンカチで手を拭きながら桑田

は口の端で言った。

「え？」

肩をすくめ、松尾は聞きかえした。

「すごいじゃねえの。編集長だってねえ。我が社はじまつて以来のスピード大出世だもんねえ」

ひやかし口調だったが桑田の顔はわりあい真面目だった。さすがに早耳のクー坊である。週末に田中丸社長の言っていたことがもう桑田の耳に入っているのだ。でも正確にはまだ社長から「そうしないか」と言われているだけで、松尾がきちんとそれに応えたわけではない。正確にはその日田中丸社長が出社した時、松尾が社長の前で「はい」と言うてからだ。

社内に田中丸社長の姿はまだなかった。百貨店ニュース社の出社時間は九時半だったが、タイムレコーダーも出勤簿もないので、みんな出社時間はかなりルーズで、大体九時半から十時ぐらいまでに社員の顔ぶれが揃う、という状態だった。

すでに机の前に座っている人も、自分が入ってきたお茶をすすっていたり、読んできたスポーツ新聞の残りの頁に目を走らせていたりというのが殆どで朝の仕事はじめの熱気などというのは部屋のどこにもなかった。

編集長の亀沼はネクタイをゆるめ、ワイシャツの首のあ

たりを大きくはだけて電気カミソリで髭を剃っていた。時おりカミソリを顎や首から急いで引きはなし、上半身をゆするようにして「うげっうげっ」とおかしな声を出している。二日酔いとタバコの喫いすぎによる朝の吐き気運動というのをやっているのだ。

その前の席にはザンバラ髪の青島六助が無表情のまま視線を空中に漂わせている。青島は社歴六年のベテランで、仲間たちと詩の同人雑誌をやっている。「サラリーマンの日常なんていうものは二ワトリの昼寝みたいなもんなんだよ松尾くん。つまりどっちも無駄なのさ、くくく」と、青島は松尾が新入社員としてその部署に配属された時、まず最初にそんなことを言ったのだ。

その隣の席にいた大柄の二村正一だけが目下社内にいる男たちの中では唯一鉛筆とノートを前にして「本日の業務」ということを考えているようだった。二村は四角い顔と四角い肩をして、いつも二、三本の長い前髪をはらりと額に落としていた。

二村正一は二十八歳で、陸上自衛隊から業界紙の会社に移転してきた変わり種だった。

松尾勇がその会社に入社した時、まず最初に目にとび込んできたのは二村の姿だった。

二村は一メートル八十センチの長身で端整な二枚目顔だ

った。バイタリスとヘアードライヤーで仕上げた髪型はきっちりした七・三分けで、長い方の髪の前端を二、三本ハシリと額の上に程よく落としているところなどひと昔前の松竹的メロドラマの主人公そのものだった。

その上自衛隊仕込みのいつもぴんと伸ばした背筋、大きく明瞭な話し方など、どこをとってもその会社では一番目立つ存在だった。

仕事も真面目で、勤務態度もきちんとしていた。どうしてもこんなに優秀な人がこんな小さな業界紙に勤めているのだろう、というのが松尾の素朴な疑問でもあった。

まだ出社していなかったが、二村の向かい側に座っている角井修はまったくその正反対で『百貨店ニュース』の編集部の中では常習遅刻者であり、行方不明の名人で、喧嘩吹っかけ屋という三拍子揃った問題社員だった。おまけに常に煙草を口から離さず、亀沼編集長のヘヴィスモーカーの上を行くチェーンスモーカーを自認していた。そのためはまだ三十歳だというのに上下の歯はヤニで黒く染まり、右手の親指から中指までへっつい回りの壁のように見事に赤黒く煙にやけていた。

通称「ヤニ角」。会社にくるとしかめっ面をして小さな鉛筆でごしごし原稿を書き、すぐにまたどこかへ消えてしまふのだった。